

翻訳から見る日中両国語の擬音語と擬態語について

— その形態と文法機能の異同を中心に —

龐 焱

Onomatopoeia in Japanese and Chinese Languages from the Perspective of Translation
— Centered on the Differences and Similarities in the Formats and Grammatical Functions —

PANG Yan

要 旨

本論文は、翻訳作業を通じて見た日本語と中国語の擬音語・擬態語を取り上げ、それらを比較・対照することにより、日中両言語の擬音語・擬態語、特にその形態及び文法機能の異同を考察することを目的としている。

日中両言語の擬音語・擬態語の分析を通して言えることは、日本語、中国語のいずれも、適切な擬音語・擬態語を使った場合、表現を生き生きとさせ、動作そのものの状態がよりはっきりしていることである。日中両言語の特性を理解し、正確に翻訳をしていくために、より効率的な日中両国語に対応できる擬音語・擬態語の翻訳パターンを纏めていくことを今後の研究内容と考えている。

キーワード：擬音語、擬態語、形態、文法、異同、比較、対照

Summary

This paper compares and contrasts onomatopoeia in Japanese and Chinese languages collected from translation work to examine the differences and similarities in their formats. This paper discovers through comparative analysis that proper use of onomatopoeia in Japanese and Chinese languages can make expressions more vivid and the state of movements clearer. More effective onomatopoeia translation models between Japanese and Chinese are to be summarized for better understanding of the features of the two languages and proper translation in Japanese and Chinese, which will be a major part of the author's research work.

Keywords: Onomatopoeia, Format, Grammar, Similarities and Differences, Comparison, Contrast

初めに

擬音語・擬態語が多いことは、日本語の特徴の一つである（玉村 1992:145）。日本語の学習者にとって、擬音語・擬態語は習得しにくいものでもある。本論文は、翻訳作業を通じて見た日本語と中国語の擬音語・擬態語を取り上げ、それらを比較・対照することにより、日中両言語の擬音語・擬態語、特にその形態と文法機能の異同を考察することを、目的としている。

1. 先行研究の概観

日本語の特色の一つに擬音語・擬態語があり、文章を生き生きとさせる機能があると言われている。その数と形態は、世界中のほかの言語より豊富であるとされている。『暮らしのことは擬音・擬態語辞典』によれば、日本語の擬音語・擬態語の数は欧米語や中国語の3倍から5倍もあるとされている。

日本語の擬音語・擬態語についての研究は、音声・音韻構造の観点から始まった。小嶋（1972）、石垣（1965）、泉（1976）、金田一（1978）などは、音韻構造、形態的特徴について様々な視点から研究を行った。天沼（1989）は、日本語の擬音語・擬態語を拍数によって分類し、語例を当てはめてある種の規則性を決めた。

擬音語・擬態語の形態について、金田一（1978）、田守・スコウラップ（1999）、角岡（2007）は、日本語における擬音語・擬態語の形態は主に1モーラ（一拍 CV）あるいは2モーラ（二拍 CVCV）の基本形を語基として、それに促音、撥音、長音を付けたり、語基を反復させたりすることによって形態を豊富にさせると述べている。その中で、ABAB型擬音語・擬態語は2モーラを反復させる形であり、数も最も多く、擬音語・擬態語の代表的な形とも言える。

一方、日本語教育の観点からの研究は、玉村（1989）、生越（1989）などがある。玉村（1989）は、日本語教育の観点から日本語の音象徴語の数、位相、歴史と地方性、表記などの特徴を明らかにし、音象徴語の指導について記述している。生越（1989）は、朝鮮語を母語とする学習者を中心に日本語の擬音語・擬態語の教授上の問題点を記述した。

対照言語学的な観点からの研究を見ると、英語との比較を通して日本語の擬音語・擬態語の特徴を記述しようとする研究が盛んに行われてきた。日本語と中国語における擬音語と擬態語の対照研究を玉村は行っており、日本語の擬態語指向と中国語の擬音語指向の違いは、両言語の構造的差異だけではなく、二つの民族性の違いにも関連すると指摘している（1992）。呉（2002）は翻訳者の視点から、日本語の文学作品『雪国』に出現した擬音語と擬態語224例とその三種の中国語訳の対応の妥当性を検討した。呉（2002）は、理想的な翻訳方法をまとめ、その理想的な翻訳方法という概念は徐一平など（2010）により、さらに具体化された。

これまで、擬音語・擬態語の日中対照研究においては、擬音語と擬態語を中心に、その音韻や文法機能、または対訳研究がほとんどであり、擬音語と擬態語にどのような関係があるかについての研究はまだ多くない。そこで、本論文では、擬音語と擬態語の形態に焦点をあて、日

本語の擬音語と擬態語を中国語に訳してから、どのような形態で現れているのかを例として、日中両言語における擬音語と擬態語の形態についての対照をしたい。

2. 翻訳作業を通じて見た擬音語と擬態語

2.1 翻訳作業を通じて見た擬音語

擬音語は、修辞上重要な役割を果たす。それを使用することにより、言語が生き生きとし、表現に具体性が伴う。その点では日本語も中国語も同様である。この節では、主として、翻訳作業から見た日本語と中国語の擬音語の問題について比較対照し、その構成上の違いなどに触れる。

日本語の擬音語・擬態語の形態について金田一（1978）は次のように分類している。

(1) 一拍語のもの

ふ（と） つ（と）

(2) 一拍の語根+「い」「ん」「っ」引く音のもの

つい（と） ぷい（と） ぼん（と） わん かつ（と） もう
さっ（と） ちょっ（と） にゅっ（と） じっ（と） きゃっ（と）
にゃあ ちゅう ぴい

(3) 二拍の語根のもの

がば（と） ぴた（と） にゃお びよ

(4) 一拍の語根+「い」「う」「ん」「っ」のうちのものが二個

ごうん ばいん ほうっ

(5) 二拍の語根+「っ」の形のもの

ごろっ（と） ばさっ（と） ばたっ（と） ぴかっ（と） ぴたっ（と）
ぽかっ（と） ぽきっ（と）

(6) 二拍の語根+「ん」の形のもの

かちん（と） こつん（と） ときん（と） ばたん（と） ぴよこん（と）
ぺたん（と） ぽかん（と） ぽちゃん（と）

(7) 二拍の語根+「り」の形のもの

ぐるり（と） ごろり（と） つるり（と） ぴかり（と）

(8) (7) の一種「り」でないもの、古風な語

うらら しとど そよろ とどろ

(9) 二拍の語根の中間に、つめ、はねの入ったもの

ざんぶ（と） むんず（と） やんや（と） かつか（と） きゃっきゃ（と）
さっさ（と） すっく（と） せっせ（と） はっし（と） ぱっぱ（と）
やっき（と）

(10) (7) の形の第一拍と第二拍の間に、はねる音、つめる音の入ったもの

あんぐり ぐんにやり こんがり こんもり ちんまり どんぶり まんじり

やんわり あっさり うっとり おっとり がっかり がっくり きっちり
くっつき さっぱり しっかり しっぽり すっかり

- (11) 二拍の語根の繰り返し、ことに第二音が、ラ行のことが多い

からから がらがら かりかり きらきら くるくる こりこり ころころ
さらさら ざらざら じゃらじゃら しゃりしゃり じりじり するする
そろそろ ぞろぞろ たらたら つるつる とろとろ いそいそ かさかさ
かたかた かちかち がぶがぶ きびきび くしゃくしゃ ぐずぐず
くよくよ げぶげぶ ごしごし こそこそ こちこち ごとごと ごぼごぼ

- (12) 前項に似て類音のものを重ねるもの

あたふた かさこそ かたこと からころ ちらほら つべこべ
べちゃくちゃ むしゃくしゃ

- (13) 全く似ていない二拍を重ねたもの

がたびし そそくさ(と) ちょこなん(と) すたこら ちょこまか
ぱちくり

- (14) 二拍語+「りん」「りっ」の形

くるりっ(と) ころりん

- (15) 五拍のもの

ころりんこ(と) ころりかん(と)

- (16) (7)(8)(9)の繰り返し

ぐでんぐでん ころりころり ごろんごろん のたりのたり ぱっかぱっか

- (17) (16)に似てあとのものは、多少形の違うもの

しどろもどろ てんやわんや のらりくらり やっさもっさ

その中には擬音語・擬態語をはっきり区別できない語があるが、擬音語として使用される例を取り上げると、以下の例が挙げられる。

- | | | | |
|-------------|-------------|-------------|------------|
| (1) かっ(と) | (2) ごうん | (3) ほうっ | (4) ばさっ(と) |
| (5) ばたっ(と) | (6) かちん(と) | (7) ぴたっ(と) | (8) がらがら |
| (9) かりかり | (10) からから | (11) ころころ | (12) さらさら |
| (13) こりこり | (14) じゃらじゃら | (15) しゃりしゃり | (16) ざらざら |
| (17) つるつる | (18) かさかさ | (19) じりじり | (20) かちかち |
| (21) がぶがぶ | (22) かたかた | (23) こちこち | (24) ごぼごぼ |
| (25) かさこそ | (26) かたこと | (27) からころ | (28) がたびし |
| (29) こけこっこう | | | |

以上の29例を見ると、日本語の場合、擬音語は一拍ないし数拍からなっており、二拍の語根の繰り返しである四拍語がもっとも多い。四拍以上のものは殆ど二拍語からなっている疊語で

ある。次にそれら擬音語の例文を挙げ、中国語ではどう翻訳されるか、日本語と対応する擬音語がはたして存在するかどうか、どのような形態をとるのかを見てみよう。

(1) かっ (と)

大石に釜をかっと打ち込んだ。

凿子咚地一下¹⁾，打进大石头里。

(2) ごうん

秋の夕べ、ごうんとつく山寺の鐘の音もひとしお寂しい。

秋天的晚上，山寺铛——的钟声会引起更加寂寞的感觉。

(3) ぼうっ

ぼうっと汽笛を鳴らして、田舎の駅を深夜の汽車が出る。

呜——地鸣着汽笛，深夜火车从乡下的车站出发了。

(4) ばさっ (と)

茶店に腰掛けたとたんにはばさつと葦簾が倒れてきた。

我刚在茶馆坐下，芦苇帘子就哗啦一下掉了下来。

(5) ばたっ (と)

煙草ケースを差し出して煙草をすすめ、自分も一本抜いてばたつとしめる。

把香烟盒拿出来让客人吸烟，自己也拿了一支，然后啪地一声合上了。

(6) かちん (と)

あめ玉を奥歯でかちんと二つに割って半分を赤ちゃんの口に入れてやる。

用牙齿嘎地一声把糖果咬成两半，把一半放进婴儿嘴里。

(7) びたっ (と)

自分の額を平手でびたつと叩いて「ああ、なるほど」。

用巴掌啪地拍了一下自己的额头说，“果然如此”。

(8) がらがら

大きな地震で屋根瓦が、がらがら音を立てて落ちてきた。

发生了地震，屋顶上地瓦哗啦哗啦地掉了下来。

(9) かりかり

なべにはりついたキャラメルをスプーンでかりかりとそぎ落としている。

用调羹把贴在锅上地牛奶糖咔嚓咔嚓地刮掉。

(10) からから

夜更けの町で下駄の音だけがからからと響く。

深夜地城市，只有木屐的声音在嘎嗒嘎嗒地回想。

(11) ころころ

床に落ちた鉛筆はそのままころころとむこうの椅子のかげに転がっていった。

落在地板上的铅笔，就这样骨碌骨碌地转到对面地椅子后头去了。

1) 下線を引いている中国語は、例文の中の日本語の擬音語に対応するものである。

- (12) さらさら
きれいな小川がさらさらと庭内に流れ込んで池に注ぐ。
清澈的小河，潺潺流进院子，然后注入池中。
- (13) こりこり
あまりしなびていない、こりこりとしたたくあんがすきだ。
我喜欢的是不太干的，嘎巴嘎巴脆的咸萝卜。
- (14) じゃらじゃら
長い鎖をじゃらじゃら引きながら、犬が歩道を逃げていく。
狗哗啦啦地拖着狗链穿过人行道逃走了。
- (15) しゃりしゃり
一合ほどの米を土鍋に入れ、指先でしゃりしゃりとかき回してといだことにする。
把一合左右的米倒进砂锅里，用手指沙拉沙拉地搅和，就算淘完了。
- (16) ざらざら
基石をざらざらつかみ出す。
哗啦哗啦地抓起了围棋子。
- (17) つるつる
店内のあちこちから、つるつる、つるつる、そばやうどんをすすする音が聞こえる。
店里到处都能听到呼呼吃面条的声音。
- (18) かさかさ
風が吹きすぎると枝に残った枯葉がかさかさと音を立てる。
风一吹过，树上剩下地枯叶沙沙作响。
- (19) じりじり
目覚まし時計がじりじりと時刻を知らせる。
闹钟叮铃铃地响着预报时刻。
- (20) かちかち
このライターいくらかちかちやってもつきやしない。
这个打火机咔嚓咔嚓地打了好几下，怎么也打不着。
- (21) がぶがぶ
そんなに水ばかりがぶがぶ飲んで、お腹を壊してもしりませんよ。
你咕噜咕噜地喝那么多水，肚子坏了找我也不管。
- (22) かたかた
小箱の中にはさいころでも入っているのかふるとかたかたと音がする。
是不是小盒子里有甩子，动了一下就嘎嗒嘎嗒作响。
- (23) こちこち
枕元で置時計がこちこち時を刻む音を聞きながら目覚めている病院の長い夜。
在医院地长夜里，听着枕头旁的闹钟地滴答滴答地走着。

- (24) ごぼごぼ
水を含んでごぼごぼと口をすすぐ。
含着水咕噜咕噜地漱口。
- (25) かさこそ
木の実をあさるリスか鳥でもいるのか木の葉がかさこそ音を立てる。
可能有松鼠或鸟在树上寻找果实，弄得树叶沙沙地作响。
- (26) かたこと
食器棚の中のものがかたことなる程度の地震でした。
这次地震很轻，只不过是碗架上的东西发出了丁零当啷的声音。
- (27) からころ
石畳の道をからころとその音を楽しむかのように下駄を鳴らして歩く。
木屐踩着石板道，发出嘎达嘎达的声音，好像伴奏似的。
- (28) がたびし
立て付けの悪い表戸をがたびしと開けて中へ踏み込むとぷんとかび臭いにおい。
嘎吱嘎吱地打开制作粗糙的大门，迈进去，里面霉味冲鼻。
- (29) こけこっこう
昔は夜明けとともに雄鶏がこけこっこうと時の声で一日が始まることになっていたの
だが。
以前，公鸡喔喔的叫声预示着一天开始。

以上の結果を整理すると、以下のようになる。

- (A) (日本語) 一拍または二拍の語源に「っ」「う」「ん」形のもの
(中国語) A 地 (咋地一下)
A 地一下 (咚地一下)
AB (吧嗒)
- (B) (日本語) 二拍の語源の繰り返しの形のもの
(中国語) AA (沙沙……)
ABAB (咕噜咕噜……)
ABCD (丁零当啷……)
- (C) その他
こけこっこう (喔喔喔……)

更に詳しく見ると、(A) グループは瞬間的、時間的に短いものである。(B) グループは (A) より量感があり、連続音を表している。中国語の場合も日本語と同様、音のニュアンスが十分に含まれている。しかし、日本語とかなり近い音声もあれば、全く異なるものもあり、必ずしも一致していない。このグループに属している四拍語の数は最も多い。(C) は日本語と音声

の差が最も著しい。この種のもの、つまり、動物、鳥、虫の鳴き声は日本語の場合、実に多種多様である。一方、中国語では、同じ音声の利用が目立つ。

文法の面からの考察であるが、一般の国語辞典、学校文法では副詞として総括されている。しかし、形式的には、副詞的修飾語と見るべきである。実質的には一種の形容詞である。

中国語の場合は、日本語と同様、擬声そのものが語彙構成の働きを持っており、修飾手法の一つでもある。さらに、具体的に言えば、中国語の擬音語は形容詞に近い性質を有し、その時に応じて、状語、限定語、補語になるが、主として、状語になる。29例の内、その大半が状語の形をとっている。

2.2 翻訳作業を通じてみた擬態語

日本語に擬態語が多い理由の一つに、漢語による擬態語が古くから大和言葉の中に大量に取り入れられたことがあげられる。その結果、さまざまな音型が工夫され、日本語として定着してきたのである。したがって、擬態語の面から考えても、中国語と日本語は非常に密接な関係を有していることになる。

それでは、漢語の影響を受けて、独自の擬音語・擬態語を築きあげた日本語と中国語の関係はどのようになっているのか、或いは、我々が日常使っている各種の擬態語は中国語ではどのように表現されているのか、という点について考えてみよう。

日本語の擬態語をそのまま中国語に置き換えることは殆ど不可能である。それに代わる表現を大別すると、次のように整理される。

A. 成語で表現される例「(日) 擬態語 → (中) 成語」

- (1) どんな難しい計算でも、あっさり²⁾やっつのける。／不管多么复杂地计算，也都轻而易举地解决了。
- (2) けばけばしいメイキャップの娘の顔に肝を潰して、田舎の母親はあんぐりと口を開けて見つめていた。／乡下的母亲一看到女儿地浓妆艳抹，吓得目瞪口呆，一句话也说不出。

B. 強調形で表せる例「(日) 擬態語 → (中) AABB」

- (1) 子供が生まれたという電話であたふたと会社を飛び出していった。／接到孩子出生了的电话，慌慌张张地跑出了公司。
- (2) かばんにありったけの衣類をぎゅーぎゅー詰め込んで、出て行っただけ帰ってこない。／把所有的衣服结结实实地塞进去，他打算出去不回来了。
- (3) いっせいに明かりをつけたタワービルが、真っ暗な夜空にくっきり浮き上がる。／塔式大楼灯火辉煌，在黑夜中清清楚楚显现出来。
- (4) かんしゃく持ちの父に仕えて、一生おどおど暮らしたあわれな母親。／目前侍奉常发脾气地父亲，一辈子战战兢兢地过日子，实在太可怜。

2) 下線を引いている日本語と中国語は意味が対応しているものをさす。

C. 形容詞（実詞）、ABB で表せる例

- (1) 道がカチカチに凍っているんだから、タイヤにチェーン無しでは危ない。／因为道路冻得硬邦邦，所以轮胎上没有铁链很危险。
- (2) 雨に濡れた靴、足を入れると、じとじとと気持ちが悪い。／鞋被雨打湿了，脚放进去，感到湿漉漉的，很不舒服。
- (3) 本場のカレー。一口含んだだけで口中がかっか。／原产地地咖喱，吃一口嘴里就火辣辣地。

以上、日本語の擬態語がそのまま中国語に翻訳することができず、他の表現で擬態語を示す例を A、B、C グループに分類してみた。ここに取り上げた例は、それぞれの分類の中の一部である。この節から日本語の擬態語をそのまま中国語に翻訳できない現象が多く見られる。

以上のような分析を通して言えることは、日本語、中国語のいずれも、適切な擬音語・擬態語を使った場合、表現を生き生きとさせ、動作そのものの状態がよりはっきりしていることである。一方同じ物音や鳴き声を聞きながら、日本語と中国語で結果的に異なった音声表現される例も少なくない。しかし、そこに日中両言語の特性を示す一面が現れてくるという見方ができるかもしれない。擬音語も中国語では、それが、数多く使用されて良いはずの童話においてさえ使用例が日本語に比べ、かなり少ない。これは、中国語の表現力の貧弱さを意味するのではなく、中国語の擬音語表現が日本語より少ないことに原因がある。また、擬音語は名詞（幼児語）になることもでき、言葉の造語力の向上にも役立つ面があるので、決して軽視できないものである。これらの点について、考察を加えていくことも、日中両国語の特性を理解する上で大切なことであろう。

3. 文法機能に関する対照

以上の結果を中心に整理することは、日本語と中国語との擬音語・擬態語の文法機能の異同を的確に把握する一助になる。

3.1 擬音語の対照

擬音語の品詞分類について、学者の考え方と立場がそれぞれ違っているし、中国語と日本語との文の構造も異なっている。したがって、これを対照するにあたって、慎重な態度をとるべきである。しかし、擬音語の性質により、その特徴はいずれも外界の音声を描写したり、表現したりして、生き生きとした具体性を持たせるという点では共通しており、両国語の擬音語の文法機能を対照することは十分可能である。

3.1.1 日中両言語の擬音語は共に連用修飾を構成することができる

擬音語の性質により、客観外界の音声をまねる働きが主になっているから、その音声を描写することになる。そこで、音声を描写して、その音声の特徴を表し、動詞などを修飾すること

がまず考えられる。

日本語の擬音語を見ると、「連用修飾語として用いられるのが常である（その場合、「と」を伴うこともある）」。

- 〈1〉 一人娘、Mさんは結婚式では、おいおい声をあげて泣いた。

在独生女儿M小姐的结婚典礼上，（她）哇哇地哭了。

- 〈2〉 苦心して入手した鳥が「カー」と鳴くと、倉庫内に百二、三十羽のはとは豆鉄砲を食ったかのように右へ左へと逃げ回った。

好不容易捉到的小鸟“嘎嘎”地一叫，仓库里一百二三十只的鸽子全部像吃了炮子似的四处逃窜起来。

- 〈3〉 やがて台所から湯気が立ち上がり、とんとんものを刻む音がして、Mさんが器用な手つきで雑煮を作る。

不久厨房冒起了烟气，并发出了“噔噔”的响声，M小姐很灵活地开始煮起了泡饭。

中国語の擬音語も日本語と同様に連用修飾語として動詞を修飾することができる。例えば、

- 〈4〉 胸脯剧烈地一起一伏，呼哧呼哧地喘着，牙齿咬得嘎吱嘎吱地响。

胸を激しくうねらせながら、はあはあと荒い息をして、こつこつと歯ぎしりをしている。

などがその例である。

しかし、よく見ると、中国語の擬音語が連用修飾語を構成する場合、単なる擬音語だけで、連用修飾語をなすことがたまにはある。しかし、多くの場合、構文上、他の語と一緒にあって連用修飾語をなすことが多い。それを簡単に分類すると、次のように連用修飾語をなすのが普通である。

A. 擬音語+的（または地）+動詞 これは擬音語が連用修飾語をなす場合の一番簡単な構造である。例を挙げてみよう。

- （1） 狼们站定了，耸着肩，伸出舌头，咻咻地鸣着，放着绿的眼光看他扬长地走。

狼たちは立ち上がった。肩をすぼめて、舌を伸ばし、すうすうと叫びながら、緑色のまなざしで、彼が遠ざかっていくところをじっと見ている。

- （2） 海水波波地响着，汽船靠上了码头。

海水がごとごとと音を立てている中で、汽船が埠頭に近づいた。

- （3） その時、ピシッという音とともにフロントガラスが蜘蛛の巣のようにひび割れた。

这个时候，只听到“啪”的一声，大堂的玻璃像蜘蛛网似的裂开了。

- （4） 「ひゅー」と音がして、矢が飛んできました。

“嗖”的一声，箭飞了出去。

中国語の象声詞は形容詞と同じように「的」をつけて或いは後の名詞を修飾し得るが、しかし、日本語の擬音語はできない。この場合、「と」や「という」の形を取らなければならない。

また、主として「～+的+一+声」という形になって、動作の場面がありありと描写されて、その音声が読者をして、あたかも耳もとで聞こえたような気分を起こさせる。

C. 「擬音語+一+動詞」という文節をなして、擬音語は文節の中の動詞を修飾する。

(1) 接着便是噗嗤地一笑，哭声没有了。

それから、ぷっと笑い出して、泣き声がなくなった。

ここまで明らかにしてきたように、日中両言語の擬音語はともに連用修飾語を構成する機能を持っている。中国語の擬音語は「的」という助詞を添えなければならないのに対して、日本語の擬音語は「と」を伴って使うのである。

3.1.2 日中両言語の擬音語は共に連体修飾語を構成する機能を持つ

連体修飾語を構成する場合、擬音語はその性質上、形容詞と同等になるはずであるが、日中両言語の実態を見ると、擬音語そのものはあくまでも直接連体修飾語を構成して体言を修飾するのではなく、いずれも他の語を添えて連体修飾語をつくって体言を修飾する形を取っている。特に、日本語の擬音語について、一部の学者の意見により、擬音語が連体修飾語を構成することはないと主張している。しかし、中国語の擬音語と比較するのに便利な方法として、擬音語に何か語をつけて体言を修飾するケースを取り出して連体修飾語をなすものと見なして、両言語の対照をすることにする。

日本語では、擬音語の後に「という」、「というふうな」などの語をつけて、文節を作って、音声、様子を描写することはしばしば見られることである。

(1) ずしーんというすごい音がして、室内の戸棚や本箱がかたかたとゆれた。

听到了“哗”的一声巨响后，房子里的架子和书柜都嘎吱嘎吱地摇了起来。

(2) がーんというものすごい衝突音に付近の二三十人が飛び出した。

“咣”的一声巨大的撞击声后，附近跑出了二三十个人。

中国語の擬音語も連体修飾語を成して、体言を修飾できる。この場合、普通日本語と同様に他の語を添えて連体修飾節を作る。しかし、普通は一拍の擬音語または二拍の擬音語は疊語の形で「的」という助詞をつけて文節を作って体言を修飾する。式で表すと、

A の疊語+的+名詞

又は

AB の疊語 + 的 + 名詞

- (3) 突然一辆疾驰的汽车地啾啾声——响得作怪，似乎就停在楼下，
ふと、急スピードで走っている車がごとごとと、変な音がして、まるですぐビルの下
に止まったようです。
- (4) 哗啦哗啦的水从梳妆台侧地小门外传来，说明那漂亮聪明地少妇正在那里洗浴了。
さらさらの水音が洗面所の横から聞こえてきた。それはあのきれいで聡明な婦人がお
風呂に入っていることだ。
- (5) 她凶狠狠的脸上，露出阴森森的笑来，
彼女の恐ろしい顔には、気味の悪い笑顔が現れてきた。

しかし、場合によって、擬音語は何も他の語を添えずに、直接体言の前に来て、体言を修飾することもある。ただ、この場合は、一拍の擬音語の疊語に限る。例えば、沙沙声、咔咔声、などの例はしばしば見かけるもので、それほど少くない。

日本語はどうかというと、普通はこの形で修飾することはない。しかし、例外であるかもしれないが、日本語の擬音語もそれと同様に疊語の形で直接体言を修飾することもある。例えば、

- (6) 人間は年を取るにつれて、高い声が聞こえなくなる。女性のソプラノやキンキン声は老人にとって苦手というように、相手の声の性質（声の高さ）で聞こえたり聞こえなかったりする。

のような例文がある。この文では、明らかに「キンキン」という擬音語が直接「声」という体言を修飾している。もちろん、考え方によってこのような解釈を認めない人がいるかもしれないが、少なくとも、擬音語と体言が直接つながることがあることは免れない。

D. 中国語の擬音語は動詞として使うこともあるが、日本語では、このような現象は稀である。

中国語の擬音語は品詞分類上未だに曖昧である。一部の語は日本語の品詞は日本語の品詞分類に同調させて考えてみると、擬音語か擬態語かその区別がつけにくい場合がたくさんある。しかし、中国の学者によれば、このような語はやはり擬音語の中に入れられているし、また、動詞として使われることもある。よって、これらの語も擬音語として見た方が適当である。品詞の分類は、擬音語の性質を持つ一部の語は動詞として使われるか、或いは、動詞に転じて、使われるかである。次のような例が確かに存在する。

- (1) 回头来，他朝孙儿瞅了一眼，心里咕噜着：“你们这些可怜地孩子啊！”

振り返って、彼が孫をちょっと見かけて、心の中で囁いた、「あなたたち、可哀
そうだよ」と。

- (2) 嘀嗒一点油。

一滴の油が滴った。

- (3) 李逵用手一抬，呼哧了一声，只见人都飞奔起来。

李逵が手をあげると、人々はみんな走りだした。

また、音韻的に見ると、動詞として使う場合には、アクセント（中国語の四声）が変わり、
二拍目が「轻声」になる。上記の例で説明すると、次のようになる。

擬音語 普通の場合のアクセント 動詞の場合のアクセント

咕噜	gū lū	gū lu
嘀嗒	dī dā	dī da
呼哧	hū xiào	hu xiao

日本語についていうと、結論を出すところまでは至っていないが、しかし、一部の学者の
説を見ると、擬音語と擬態語を対立させて、擬音語は述語を成すことはないと主張している。
また、実例で言うと、擬音語（擬態語ではない）が動詞として使われることはあまり見られ
ない。

E. 中国語の擬音語は独立として使うことが多いが、日本語では、稀である。

以上からも分かるように、中国語の擬音語は単なる独立語として使われ、独立文節を作る
ことが非常に多い。むしろ、中国語は使い方において、独立文節を作る場合が一番多く、最
も重要で、一番普通の使い方だと言えるであろう。

- (1) “奶妈熊，你这连长鸟用！”——啪！一枪，刘连长胸部给打穿了。

“馬鹿野郎、貴方のような中隊長は全然役に立たない。”「ぱん」と、劉中隊長の
胸が打たれた。

このような例はいくらでもある。独立語として、独立文節を作ることが非常に多い。この
ような現象が、一部の学者をして擬音語を感嘆詞の一部として扱わせた理由なのかもしれな
いが、文法機能上、中国語の擬音語の特徴なのである。

それに反して、日本語の擬音語は独立語として、独立文節を作ることがないとは断言でき
ないが、「と」を伴って（あるいは伴わない場合があるが）修飾する場合が圧倒的に優勢で
ある。

F. 中国語の擬音語は目的語として使うことがあるが、日本語では、そのような用法をしな
い。

- (1) 小王忍不住叫了一声“哎哟”，将嘴一张。

「ああ」と、王さんは叫びだして、口を開けた。

G. 中国語の擬音語・擬態語は補語になる場合がある。

(1) 鈴儿响叮当。

鐘がゴーンゴーンと鳴った。

H. 中国語と日本語の擬声語は主語になる場合がある。

(1) “沙、沙、沙”，像秋天细雨的声音，所有的蚕都在那里吃桑叶。

さくさくと、秋の小雨のような音を立てて、すべての蚕が桑を食べている。

(2) 今の「ポンポン」は銃声だった。

刚才的“啪啪”声是枪声。

この用法は、中国語でも日本語でも特別な場合にしか使わない。

以上、両言語の擬音語の文法機能を分析してきた。簡単にまとめてみると、両言語の擬音語とも連体修飾語と連用修飾語を作る。但し、中国語の擬音語は動詞として、使うことも少なくなく、独立語として、独立文節を作ることが多いが、日本語の擬音語にはあまり見られない。日本語の擬音語の主たる使い方は連用修飾語を構成することである。

3.2 擬態語の対照

前節で述べたように、擬態語の翻訳は一層複雑であるために、ほとんどの擬態語は、文章の中で、助詞「と」をつけて、或いはそのまま直接後にくる動詞を修飾する。

(1) 大男ぞろいのボディーガードに囲まれながら、首相はとことこと大統領のそばへ近づいて行った。

首相被几个大个子保镖簇拥着，快步走向了总统。

一部の擬態語（特に重ね言葉の擬態語の一部）は、形容動詞的な用法をする。

(2) 滞米七年、英語がぺらぺらになって、帰国した。

他在美国呆了七年，英语说得非常流利后回国了。

また一部の擬態語は、「サ変」となり、文章の中で述語にもなる。

(3) 田舎から出てきたお婆さんは、上野駅の広い構内で、どこへ行ってもよいかわからずまごまごしていた。

从乡下来的老太太，在上野车站里，惊慌失措地不知去哪里。

更に、一部の擬態語は「……（と）した」の形で、連体修飾語の役割をする。

(4) 交渉に当たっては、きっぱりした態度で臨んでもらいたい。

交渉过程中，希望能够以公正的态度面对。

以上のように、擬態語の文中作用は一定したものではない。これに対して、中国語には、それに対応する「語群」もないので、翻訳には苦勞が強いられる。

したがって、擬態語の文中における機能を比較するには、やはり翻訳作業を通して、見ていかなければ結論が非常に出にくい。

A. 疊語に訳されるもの

前述のように、中国語の疊語の一つは、状態を象徴することである。それで、日本語の擬態語を翻訳するとき、これもよく使われる。

- (1) そしてがっしりその両肩を掴む。

然后紧紧抓住她的双肩。

- (2) 汗が上衣まで通って、背の出張ったところ通りの形にぐっしり濡れていた。

汗水浸湿了上衣，湿漉漉地粘在肌肉突起地背脊上。

- (3) くりくりした男の子、背の高い女の子。

肉墩墩的男孩子，高身量地女孩子。

- (4) そうして帳面の上の端から下の端まで、細かい字がぎっちり書いてある。

从上到下的纸上，密密麻麻写满了蚂蚁大的小字。

B. 「～然」の形に訳されるもの

中国語の接尾詞「然」がよく「……の様子」という意味を表すので、日本語の擬態語の翻訳に際して、「～然」の形も常に用いる。

- (5) 正太郎はぞくりと身震いをした。

正太郎悚然地打了一个寒噤。

- (6) 私が楽しい気がしました。

我飘飘然地反而觉得高兴起来。

C. 「形状詞」に訳されるもの

「形状詞」はよく擬態語の翻訳に対応され、使われている。

- (7) 矢口、亀山。キョロキョロ見回している。

矢口、龟山贼眉鼠眼地东张西望。

- (8) 満場シーンとした中に検事が着座する。

检察官在鸦雀无声的全场落座。

D. 象声詞の隱喩的用法に訳されたもの

- (9) 目をくるくるさしてびっくりしていました。

他惊讶的两个眼珠子滴溜溜只打转

- (10) そとは、じめじめと細かい雨が降っている。

外面淅沥沥地下着小雨。

E. 一般形容詞に訳される

- (11) それもこつてり白粉でも塗ったときならまた別ですけども。
如果是浓厚地涂着粉时，那当然又另当别论了。
- (12) 宿題はきちんとやります。
好好地做好家庭作业。
- (13) かっと陽が照り付けている。
灼热的太阳在空中照着。

F. 副詞に訳されるもの

- (14) それがごそりごそりと地主に取り上げられていく。
到头来收成全被地主拿走了。
- (15) 二人で二階へあがったときには、もうとっぶりくれていた。
当他们来到楼上的时候，天色已完全黑了。

G. 動詞に訳されるもの

- (16) ぐずぐずしちゃいかん。
不要磨磨蹭蹭的啦。
- (17) お恵は髪に油をてかてかつけたしゃれた男とブラブラしていた。
阿惠常常跟头发擦得亮亮的时髦男人一起游逛。

H. 「一……」の形に訳されるもの

瞬間的な動作や状態の急変などを表す擬態語は、よく「一……」の形に訳される。

- (18) 肩から力がガックリ抜けた。
肩膀一下子失去了力量。
- (19) 木谷はぎくっとして振り向いた。
木谷一怔，回过头来。
- (20) 古手拭で、くるって輪を作っても出来たよ。
用就手绢一卷，也能做个轮圈的。

I. フレーズをもって意識されるもの

中国語には、多くの形象的な比喻方法がある。これもうまく使用すれば、日本語原文の擬態語による象徴効果も生き生きと翻訳できる。

- (21) 三原はほっとした。
三原心里一块石头落了地。
- (22) 男は部屋の机の前で変にイライラと落着のない挙動で煙草を吸っている。
男的坐在桌子前面，好像心里长了草一般坐立不安地吸着烟。

4. 擬音語と擬態語の翻訳上の共通問題

本節では、実例を見ながら、日本語の擬音語・擬態語を中国語に翻訳する時に生じる問題を検討する。

ここでは14のパターンに纏めてみた。

A. 同じ語がさまざまに訳されるもの

同じ擬音語・擬態語であっても、それを翻訳する時、必ずしも一つの訳し方しかないとは限らない。その使い方、前後関係によって、幾つかの訳し方がある。

- (1) 女中さんはおいおい泣いていました。
害得女佣人哇哇地哭起来。
- (2) それきり僕が言えなくて、ただおいおい泣きました。
我再也说不下去了，只是呜呜地哭着。
- (3) 同時に女工たちがいちどにがやがや話し出した。
同时，女工们就叽叽喳喳地闲谈起来。
- (4) 署内は召集を受けた多数の警官でガヤガヤ戦場のように騒がしい。
警察署办公室里，被召集地警官们吵吵嚷嚷的，像战场一般混乱。
- (5) 今までガヤガヤ騒いでいたのが押さえられたように静かになった。
喧嚣的声音就像受到压抑似地静了下来。

以上は、一つの擬音語が、幾つかの象声詞に訳されたり、別の言葉に訳されたりする例である。

- (6) ぼんやり向かい側の車窓から見える動く景色を見ていた。
心不在焉地望着车窗外的景色
- (7) 重太郎はいったん、御右衛門から出たが、石鹸を使うでもなく、ぼんやりすわって、体の冷えに任せていた。
重太郎想到这里，从浴桶里出来，也不擦肥皂，痴痴地坐在一边，连寒冷也不顾了。
- (8) 部屋には誰もいない。ぼんやり考えるには都合が良かった。
房间里没有第二个人，正是浮想联翩地好机会。
- (9) 今まで、ぼんやりと広がっていた予感が急速に一個の形に収縮されてゆくのを感じた。
刚才朦朦胧胧的预感，到现在忽然成了事实。

以上は、一つの擬態語が多様に訳される例である。

B. 省略してもよい場合

前に触れたように、日本語の擬音語・擬態語は付加的なものとして使われることがあるので、訳文の中で必ず一対一に訳し出す必要はない。このような場合、一つ一つを訳したら、かえって訳文がくどくなる可能性もある。むしろ、思い切って割愛した方がすっきりする。

- (10) そして、瞬間に老夫婦と小島があつと顔を見合す。

就在那一霎那间，老两口和小岛打了个照面。

- (11) えっと驚くと、「でも偽者なんだよ」という。

我惊问了一声，他又说道：“可是，那是假的。”

- (12) チャンネルをカチッカチツと切り替えていたが……

把电视机的频道转来转去。

以上は擬音語の省略である。

- (13) 父の頬がガクガクと深く削りこまれていた。

父亲的颊深深地陷了进去。

- (14) ぎっちり茂りあっているけやきの大木の間からきらりと黒い湖水が光っている。

在枝叶茂盛的粗大的榕树中间，看得见黑溜溜的湖面上闪着亮光。

以上は擬態語の省略である。

以上、14のパターンに纏めたが、しかし、それだけでは、すべての翻訳方法を網羅したことにはならない。また、紙幅の関係上、用例も十分に挙げられなかった。だが、この十四パターンは、今までの翻訳文献を見た上で、常に用いられる方法だと言えよう。この十四パターンを適切に、自由に使えば、擬音語・擬態語の翻訳問題は、ほぼ解決できる。

5. 終わりに

今日の日本語には、新しい擬音語・擬態語が増える一方で、日本社会に満ち溢れる広告や漫画などにも、擬音語・擬態語が氾濫しているという。日本の国語学者が予言しているように、今後日本語の激しい変動の一つとして、擬音語・擬態語が変化していくのであろう。このことは日本国内と国外の日本語研究者の注目を集めている。これから先どのように変わっていくかは、多くの人が興味ある問題である。

語彙の研究は、日本国内でも第二次世界大戦後に盛んになった新しい分野なので、中国の日本語研究では、尚更新しい領域である。最近、国内の研究論文や学術雑誌を読むと、語義の研究や類義語の研究論文などが多くなり、語彙研究に関心が向けられている。

この新分野の中で、擬音語・擬態語の研究も展開されるであろう。今回、本論文は、問題提起のつもりで、主に、翻訳作業を通じて、論を展開していき、日本語と中国語の擬音語・擬態語の文法機能を論じ、対照しながら研究を行った。今後、文学作品の中の擬音語・擬態語の翻訳に具体的な対訳パターンをより効率的に纏めることを研究方向の一つとしている。

謝 辞

この研究は広東省教育庁特色創新項目（教育科研類）“日本語翻訳専攻修士実用型人材育成新方法探索”（プロジェクト番号：299-X5122104）の支援を受けている。ここに記して感謝したい。

参考文献

- 浅野鶴子編（1979）『擬音語・擬態語辞典』角川書店
- 天沼寧（1989）「擬音語・擬態語」『日本語学』第68号 明治書院 pp.13-29
- 王相榕（2012）「日中両国語における擬音語の対照研究——小説『ノルウェイの森』その三種の中国語訳本を中心に——」『人間文化創成科学論叢』第15巻 pp.19-26
- 小嶋孝三郎（1972）『現代文学とオノマトペ』桜楓社
- 石原幸雄（1965）「擬声語・擬態語の語構成と語形変化」『言語生活』第171集 筑摩書房 pp.30-36
- 泉邦寿（1976）「擬声語・擬態語の特質」『日本語講座第四巻 日本語の語彙と表現』大修館書店 pp.105-152
- 金田一春彦（1978）『擬音語擬態語辞典』角川書店
- 倉石武四朗（1983）『岩波日中辞典』岩波書店
- 倉石武四朗（1963）『岩波中国語辞典』岩波書店
- 玉村文郎（1989）『語彙の研究と教育（上）』国立国語研究所
- 玉村文郎（1992）「日本語と中国語における音象徴語」『日本語と中国語の対照研究論集（下）』くろしお出版 pp.145-158
- 田守育啓（1995）「日本語のオノマトペアをめぐる」『言語』18巻11号 大修館書店 p.25
- 田守育啓・スコウラップ（1999）『オノマトペー形態と意味』くろしお出版
- 趙寅秋（2014）「擬音語の擬態化についての日中対照研究」『比較社会文化研究』35号 pp.41-52
- 角岡賢一（2007）『日本語オノマトペにおける形態的音韻的体系性について』くろしお出版
- 生越まり子（1989）「日本語の擬音・擬態語教授上の問題点——（朝鮮語と韓国語）を母語とする人々に対して」『日本語学』第68号 明治書院 pp.68-72
- 松本昭（1986）「中国語と日本語」『日本語学』五巻七号 明治書院
- 望月八十吉（1974）『中国語と日本語』光生館
- 山口仲美（2003）『暮らしのことは擬音・擬態語辞典』講談社
- 李大年（2014）「日中韓三言語における笑う様子を表す擬態語の比較対照研究——表情と笑い方を中心に」熊本学園大学『文学・言語学論集』21巻第1号 pp.1-24
- 呉川（2005）『オノマトペを中心とした中日言語対照研究』白帝社
- 陳望道（1954）『修辞学発凡』新文芸出版社
- 広西師範大学中国語学部（1973）『現代漢語知識』広西人民出版社
- 徐一平・ショウ燕・呉川・施建軍（2010）『日本語擬音語・擬態語研究』学苑出版社

（原稿受理日 2016年2月17日）